

---

# 童話少女

東田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

童話少女

### 【著者名】

東田

N5931M

### 【あらすじ】

突如現れたウサギと名のる少年。

記憶を失った少女 サラは、記憶を取り戻すため彼と勝負をすることに。

その勝負の内容は、ヒロインを救う、ことだった。

不思議と現実と嘘と記憶の狭間の物語。

## preface

マエガキ

「同一視は同調を生み、同調は不協和を産む」

そう。忘れちゃいけないよ。

君たちが幼いときから見聞きした物語の中の僕ら。それらは、君  
が居なければ存在しないものであって、けれど決して君ではない。  
本やテレビ、目を通して耳を通して　いや見えない次元の空間  
を通して　僕らは君に、君は僕らになることができるんだ。  
この境界を越えてはいけないよ。

君自身は決して僕ら自身になつてはならないんだ。

決して、忘れてはならないキマリ、コト。

# prologue

## プロローグ

かわいい、かわいいサラ。さあ醜いヒロインたちを殺めよう。君だけが虚構の中に在ればいい。

君の大好きな飽くべきこの日常の世界を、君の大嫌いな愉悦しい虚構の世界へ作り変えよう。

“学校”から“家”。そのいつもと変哲など無い帰路を辿る。

寂れた商店街。

パン屋の香ばしい匂いが漂う。

床屋の象徴、赤と青が不毛に巡り合つを見とめる。

(いつもの風景)

商店街を抜けると小さな公園がある。

錆びた二つのブランコが風に揺れている。

ジャングルジムの青色が西日の軌道にそびえて反射し、私の網膜をつらぬく。

(何時もの、風景)

なのに何故、私は今、こんなにも恐怖しているのだろう。乾いた喉は出血し、鉄の味をかみしめながら疾走している。

脳にも網膜にも何ら私を戦慄させるものも焼き付いていないにも関わらず、ここが碎かれている。齧えている。

(異常な、自分)

走らなければ。早く、はやく。  
逃げなければ。

( 何から? )

追つてくるものなど何も無いではないか。

内部での自問自答が、外部への意識を虚ろにさせた。

ズシャ ッ

視界が大きく揺れて、そんな擦れるような音がしたけれど、一瞬何が起こったか判らなかつた。

自身が冷たい地面に張り付いているのを数秒経つて漸く認識したが、そのどうやら転んだ打撃のショックで呼吸と身体のコントロールがうまく出来ない。

しかし痛みに打ち拉がる余裕も何故か無い。運動神経に正常に命令がいかないのか、滑稽に上手く起き上がれない身体をがむしゃらに起こそうともがく。

一応しゃがみ込むまでの体制に落ち着いた私は、顔まで砂利まみれである不快から、目を伏せ乱暴に腕で顔を擦る。

それをしながら、立ち上がるために重力を感じる その前に、  
・ 何故か浮遊感を感じ取つた。

ただ驚き、顔から腕を離して目を咄嗟に開く。

「サラ、大丈夫？ 痛そうだ。こんな砂利道と重力があつたせいで」

今度は最大限に目を見開いた。まず聴覚よりも自身の触覚に意識がいった私は、感触を覚えた身体の箇所に自然と眼を向けていた。私の両脇を掴み支えているのは私のでない大きな両手。浮遊感はそのせいだ。私は今、その両手に持ち上げられている。  
そしてこの手の持ち主は 。

下を見ていた私は視線を上げた。

やはりそこには一つの目と鼻、口。一つの顔が私の視界に現れた。  
同じ歳頃の男の子。

ア然とした表情で彼を見詰めるしか出来ずにいる私に、目の前の顔が斜めに傾いたかと思うと、不思議そうな声色で問い合わせてきた。

「サラ？」

サラ、 然等。<sup>れんとう</sup> 一瀬然等<sup>いちのせなごり</sup>、私の名前。

漸く意識のいった聴覚。

その瞬間、ぞわっと鳥肌が立った。

「いや ツ、離して！！」

しつかりと掴まれているよう感じていたのに、私が暴れると容易に彼の手から私の身体はすり抜け、再び地面へと強打した。

「つ・・・痛……」

「……サラ。君は重力の無い世界の方が好いんじゃないかな」

痛みの中、彼の言葉を無意識に辿つて内容を把握すると同時に、思慮により、といつより本能的にわき上がった感情は、多大な嫌悪感だった。

「あなた、誰」「誰」

自分の声が恐怖して震えているものであるのに驚いた。

「へえ。本当に忘れてしまっているんだね」

そう言った彼はまじまじと、感心した、とても表現できるような様子で私を見た。

その口ぶりに私は思考する。

(会つたこと、あるの……?)

こちらも相手を見返した。

十五、六だろうか。スラリとした身体に中性的な顔立ちの姿。・・・彫りが深いというわけではないが何だか西洋らしさを思わせる顔の造りをしている。しかしそれとは対象的に日本人らしい黒色の双眼と短髪が不調和に存在していた。

観察をすればするほど彼を思い出すどころか、精神が不安定になつていくのがハツキリと感じ取れた。はたと視線が交わると落ち着き始めていた動悸と呼吸がどうしようもなく詰まつた。

「知らないつ・・・。誰よお おー！」

知らないのだから無視して立ち去ればいい。取るべき行動はちゃんと脳内で導き出されていた。にもかかわらず、私は拙い子供のように情けなく叫んだのである。

情緒不安定、だ。

隅にあつた理性でそう思つた。

「なんだサラ、変わつてないねえ。うん、それなら。・・・ビリ？やつぱりサラ、君が望む世界をつくりてみる？手始めはやはり重力のない世界つてところかな？」

かつと顔が熱くなつた。無作為な哀しさが胸中に溢れ出したと思ったところだつたのに、今度はまた嫌悪感が溢れかえる。

「何！？馬鹿なこと言わないで、ビリか行つて」

言葉の途中で、つ、と息が詰まつた。

直ぐに自分の首に手がかけられていることに気付く。

何より驚愕したのは、ある程度自分と距離があつたはずの彼が一瞬にして自分と間隔が無いといえる傍まで詰め寄つていたことだつた。

言葉も発せず、呼吸もできない。

殺されるのだといつ結論に直ぐに達して、おののき、それでいてその現状になんらかの正しさを見出だしていた。・・・何故。

「ダメか、サラ。うん、もう諦めたよ。 それじゃあ行こつか

苦痛と彼の理解できぬ言動に顔をしかめた。

「やうこえば、なほじつじよつ

もはや私の意識が遠のいていっているという現状も無視し、彼はひとり独白を続けていく。

「ああサラ、君が好きなのはウサギだったかな。 相応しいね、  
それがいい」

遠くを見ていた彼がこちらを見下ろし、再び目が合われる。  
私の視界がとらえる、暗い、暗いその瞳。

（引きずり込まれそう……）

捕らえられているのはこちらか。

馬鹿な言葉遊びを考えていると、強い眠気のような、麻酔を打た  
れたような感覚に身が投じてゆき、 意識は愈々、途絶えてゆく。

「僕の名は、ウサギだ。よろしくサラ。もひがむ無くなるサラ。  
いや、僕 虚構のものだけの サラ」

眠りにつきつづつあつた私には、何を言ったのかももう聞き取れなかつたけれど最後に聞こえた声に不快さをおもつ。けれどそれとは反対に、不快さと背反する甘い心地好さがあるということ 意識  
が完全に途切れる前に、私はそれを確かにみとめた。

## (1) 夢のあと

「ようじょシンポリカ」

「ようじょアリス」

「ようじょ白雪姫」

「ようじょ眠り姫」

大勢の人たちが笑顔で私を取り囲み、私に向かつてそう告げてい  
く。

困惑した私はそこから抜け出そうと人を搔き分け、走り出す。  
ところが予想外にぬかるんでいた地面は進むのを妨げ、思うよう  
に走れない。それどころか段々と柔からさを増した地面に私の足は  
減り込んでいった。

身体の不自由さに苛立ちを覚えながら足元を見遣る。  
すると、泥道であるとすっかり思い込んでいたそれは、一面が真  
っ白だったことに気付き、驚いた。  
思わず進むことを忘れ、身体を固くした。

「ダメじゃないかサラ」

私は条件反射で頭だけついと振り向いた。

「せつかく皆が君のために新しくケーキの山を用意したのに、こ  
んなに踏み散らかして」

私は再び足元をみやつた。

そういわれた途端、甘い匂いが立ち込めた。どうやらこの白いの  
は生クリームらしい。

私はケーキの上に居るのか。

馬鹿げてる。

「どうして自分がケーキの上にこる」とが匪夷に思え、私は相手に向かって叫んだ。

「こんな所、冗談じや無い降りしよー。」

相手　どこかで見た氣のする少年　は、わざとらしこ困った顔の上に、わざとらしこ困った声をのせた。

「君がそうしたいならここから降ろす。でも見て、うらさ

彼は歩きにくい生クリームの上をものともせず軽快に歩き、私の隣にやってきた。

続けて彼は、訝しげな目で彼を見る私の顔を掴み、遠くを見るよう促した。

「あれがクッキーの街で、あっちがキャンディーの町。チョコレートの国は……ここからじやあ見えないね」

実際、周りの景色は小さくもやがかつていて何がなんだか判らない。けれどその彼の説明に私はア然とした。

「選んで、サラ。どこに行きたい？」

「・・・どれも、嫌よ」

キッと彼を睨もうと顔を相手に向けた。ところが直ぐさまもよつとする。そこに居た筈の少年が居ない。辺りを見渡すと、騒がしく挨拶をしてきた大勢の人も見当たらなかつた。

急に不安感に襲われた私は引き返そうと一歩歩き出していくクリームとスポンジの上を歩いつつ足を動かした。

ジワリ

(なに?...やだ)

「嫌つ!」

私は思わず悲鳴をあげた。何故なら、足をあげるどころか、自分の足はケーキの中へと吸い込まれていくではないか。

もがけばもがくほど足が、いや既に胴体がめり込んでゆく。

パニックに陥つたまま、気付けばとうとう顔までが吸い込まれていこうとしていた。

私は絶望する。

飲み込まれる手前、そこに突如、田の前に一組の足が現れた。そして完全に飲み込まれる時、少年の声が聞こえた。

「君が望んだのに」

今度こそ本当に困つたよつな声だった。

\*

死んだと思った。

私は生きてきた中で一番田覚めの悪い覚醒を果たした。

田を開くといやになことに視界はシルヒとつ無い真っ白で一杯だった。

しかしそれはただの天井である」と直ぐに気がつく。

私は寝ぼけながら身を起こした。

「ただの夢、か……」

「夢?」

「そう、ケーキの夢」

質問、返答。一連の行為を抱いきつてから私はまどろむ意識から脱した。

寝ていたせいで高かつた身体の温度が急速にサアッと冷えていくのが感じ取れた。

恐る恐る、声がした方を振り向く。

木製のドアの前に少年がそこに寄り掛かり存在していた。

……しかも見覚えが確かにあった。

その見覚えがあるという記憶と共に先刻まで意識を囚われていた悪夢のことなど忘れ、一気に心拍数が上昇する。

「あなた、下校中に遭った」

私は覚醒したばかりの脳をフル回転させて思い出す。そうだ彼は、（体内時計が麻痺していて判らないが恐らく）昨日、高校からの下校途中、“あのパニック”を起こしていった所に遭遇した少年だ。  
・・・私には、理由もなく急に恐怖感に襲われパニックを起こすことが昔から多々あつた。しかしカウンセリングを受けるなどして最近ではめったに発症することがなかつたのだが……。

「ああ、それは覚えていた？安心したよ、また自己紹介をしなくてすんで」

「あなた誰」

「…………」

間髪いれずに咳いた私に対して、彼はつ、と視線を上にそらし意

味ありげに沈黙した。

いや、そんな態度をとられるなんて理不尽極まりない。

私はしかめつらを作り、ふと辺りを見回した。

そして焦る。

(そういえば、ヒーリー)

起きて直ぐその判断に行き着かなかつたこと自体驚愕だ。いや、だつて目が覚めたら見知らぬ場所であつたなんてこと当然だがあつたこともないし、……有り得ない。

十畳ほどの薄ピンク色のカーペットが敷かれた部屋。ヒーリードは、私がどうやら今まで眠りこけていたらしいこの大きなベッドと、小さな洋風な白い飾り棚一つしかない。壁、天井は真っ白で窓が無く、そして唯一の出入口は少年によつて立ち塞がれていた。

私は飾り棚に立て掛けられていた自分の鞄に気付き、さつとベッドから立ち上がりそれを掴むと、少年が佇むドアへと近寄つた。

「どいて頂戴」

上を向いていた顔がこちらに向けられた。少年と視線が交わる。

睨まれているわけでもないのに、まるで射抜かれるような視線。

：

私は密かにたじろいだが、負けまいと相手をきつく見据えた。すると彼は面白いものでもみるような顔付きで私を見返したかと思つと口を開き、そつと告げた。

「ウサギ。僕はウサギだ。よろしくサラ。・・・しかし気丈になつたもんだね」

「兎？馬鹿にしているのだろうか、それとも本当にそんな名前なんか。……いや、名前以前に、馬鹿にするような発言をされた気がす

るのは気のせいか？

それから、何故私の名を知っているのだろう。

(知り合い　?)

しかしそんな事実の発掘もどうでもいい気がした　　というより、  
考えたくないといつ方が正しいかもしない。……それよりも私は  
一刻も早くこの訳の分からぬ少年の元から立ち去ったかった。

「名前などどうでもいいわ。どうして」

「……誰、と君が問うたのに」

呆れた風に言られた。キマリ悪そうにした私もお構いなくウサギ  
と名乗る少年は続ける。

「それに、君はここから出ても、困るだけだらう」「  
・・・そんなに遠くに連れて来られたのだろうか。  
私は不安になった。

「此処はどう?・・・帰してよ」

そもそも正常な思考で判断してみると、こいつは拉致犯ではなか  
るづか。冷や汗がつゝと首筋をつたつた。

「どうに?」

瞬時に答えた彼は無邪氣そうにわらわ。

私は募りゆく不安を憤りへと化けさせることで辛つじて腋丈を  
保つた。

「どうに?どうして私の家。住んでいたところ?」

「それは一体どうなんだい?サラ」

苛立ちながら答えるとして、そして　　葉に詰まつた。

血の気が引いた。

だつて。だつて・・・自分の住んでいた場所が、思い出せない。  
なんで。

(・・・何で、どうして。私が住んでる場所よ!?.?.?.住所は?.)

……何故にどの都道府県に住んでいたかも出てこないのか。

混乱に陥った私は、咄嗟に自分は地元の高校に通っていたという事実を思い出し、高校名を口にだそうとした。

「 つ・・・

出でこない。自分が毎日通う高校の名前を思い出せないのだ。恐らく今、私の顔は真っ白だらけ。血の気が引いていくのが分かる。

自身の脳が考えられるキャパシティをすっかり越え、思考が一端フリーズした。

そして極限の精神状態の中での至な冷静さを繕つて、私はゆっくりと自分の名を呟く。

「私は……サラ

そうだ。私の名前はサラだ。

だつて彼が私をそう呼んでいた・・・。

私は両手で口元を被った。その手は震えている……どうでもよいことを頭の隅でキチンと把握した。

「……ねえ、私の苗字って・・・何、だっけ  
問わずにはいられなかつた。そう尋ね向けた顔は笑つたつもりが  
醜く歪んでいるだろう。声も情けなく、泣いているかの様に震えて  
しまつた。

そんな懇願に似た私の問いにはウサギは答えなかつた。

「忘れたといふことは、君にとつて必要ないことだつたんだろう  
代わりに与えられたのはそんな明らかなる誤答。  
検討違いな発言にとうとう私は行き場の無い混乱をベクトルが存  
在する憤慨へと変え、ウサギに向かつて叫んだ。

「そんなわけないでしょ? 必要ないなんて……！　何で、な  
んで。自分の名前すら判らないなんて」

そういうえば“サラ”ってどんな漢字だつたっけ?  
家族　。私の家族は? 居たよね? ……居たつけ? ……わから  
ない。

「……どつしよつ。病院、いかなくちや  
氣丈さを保つための怒りももつ継続していなかつた。混乱と不安、  
恐怖が自身に保管できる容量をすっかり溢れ出し、体中を侵食して  
しまつた。

「病院? 病院へ行つてもそれは治らないよ。君のは病気ではない  
から

ピクリとその言葉に私は身をふるわせた。

「・・・あなた知ってるの？」「うん、あなたが私の記憶、どうにかした……？」

私は信じられない面持ちで、しかし縋るようにウサギを見つめる。彼は驚いた顔をしたかと思うと、ゆうくりと微笑んだ。

それは優しく、驚くほど優美で。  
・・・そして残酷な、笑み。

どうしてか恐怖感が募った。私は自然と自分の身体を抱きしめていた。

「記憶をそんなに取り戻したいの？サ」

その返答に対しても私は彼を問い合わせるべきである。しかしまるで身が支配されているかのように、問い合わせることも出来ずにただ、たどたどしく頷いた。

そうした私を見とめたウサギは、綺麗な笑みに何故か自虐的なものを呟ませると、こう続けた。

「勝負をしようか。・・・君にヒロインたちが救えたなら、すべて元通りにしてあげよう」

・・・意味が、

「そうだね、先ずは君が1番好きだったアリスからこいつか」

解らない。



## (2) アリスとチシャネコ

午前七時。私は必死でパソコンのキーを叩いていた。  
しかし画面にあるのはその必死な顔とは釣り合わない対話文である。  
パソコンに繋がれたネットワーク回線に於いて、私はある少女との  
わいもない話のやり取りを行っていた。

<f r o m : チシャネコ

<アリス、おはよつ。

<今日も学校の後、話そつか。学校たのしんでいらっしゃい！

<end

私は“チシャネコ”といつも名前を使ってそんな文面を相手に発信する。

返答は今日も直ぐだった。

<from : アリス

<学校、今日も退屈なんだるうな。…この世界ってホントつまん  
ない。退屈な毎日に飽き飽きするわ。あーあ、誰かアタシを異世界  
にさらつてよつて感じ。田が覚めたら見たこともないような豪華で  
ファンタジックな場所にいるの そうだとしたらどんなにワクワ  
クするかしら！行つてきます

<end

・・・という、 “アリス” という少女の、たいへん夢見がちな返事に田を落とすと、私は自然と自分が居る場所を見渡していた。

「これは私が掠われて、記憶を失くし、田覚めた部屋である。今は、ここは古い一軒家の二階の一室であることも理解した。そして外見は古い家ながらも部屋の中は真っ白な無機質な壁、そして最低限の家具がある。まあつまり、何の変哲もない部屋なわけだ。もちろん彼女の言う様な異世界に迷い込んだわけでもなく。……ここは日常の延長線上に確かに存在する場なのだ。

なんだかなあ、と私はため息をついた。

それから午後までパソコンを使って、心辺りになりそうな地名や興味を覚えるものからの追及をして手探りで自分の記憶の手掛かりになるものを検索しまくつたり、家の外にて現在地周辺の散策をした。しかし覚えがあるものではなく、疲労とともに時間は過ぎた。

「サラ、ただいま」

ノックと共にウサギが姿を現した。

この部屋で田覚めてから既に五日間この部屋で過ごした私は、もうこの彼の登場にも慣れていた。

ところが私はウサギに振り向くと、僅かな期間ながらもそれまでと異なる変化、彼が学生制服を纏つていることに瞠目する。さつきも述べたように彼に逢つて五日過ぎたが、その間ウサギはシンプルなシャツに細見のパンツ等といった私服を身につけていた。いや、年頃からして学校に行っているというのが普通だろうが、ウサギが学生 というのは何だか奇妙な感じがする。

「ケーキ買つてきたよ、好きだろ?」

私のあからさまなウサギへの観察もお構いなしに、彼は手にしていました白い紙箱を机上に置いた。

「……私を餌付けようつたつてそつぱいかないんだから」

「君はおかしなことを言つね」

ウサギは田を伏せがちにして、どうでもよさ気にそつ宣つ。真つ黒なさらさらの髪の毛は細めのくせに、同じく真つ黒の睫毛の線はしつかりしていて長いことに気付く。いや、それはどうでもよい。・・・・・どうして奴は淡々とシャクに障ることを言うのか。それが問題だ。そもそも言動がおかしいのはお前だと言いたい。

「あんまり人を馬鹿にすると、私、今直ぐにでもあなたを訴えに行くわよ。別に律義にケーヤク守つてここにのうのうと居る必要も本当はないんだし」

ケーヤク これは、ウサギとの勝負に私が勝つたなら記憶を戻す、という彼から与えられた取り引きのことだ。私は結局、その取り引きに応じざるを得なかつた。

認めたくはないが、どうやらこいつは普通でない・・・或いはどこの少女が羨望してやまない“ファンタジーな世界”に登場するような存在なのだと、思つ……うん、恐らく。……信じがたいが、やはり彼が私の記憶を握つているのは間違いないのだ。

しかし見た目は端正な容姿、ということを考慮してもただの同じ黄色人種の日本人だ。しかも普通に学生のようだし、さらわれた場所は変わらぬ世界。何だか拍子抜けしてしまう・・・・というのは呑気過ぎるだろうか。そんなことを考えていると、うなだれたような声が聞こえた。

「よく言つよ。記憶が惜しいなら君はここに留まる必要があるだろう。……それにもかかわらず既に交番に訴えに行つたくせに」

「なつーー！」

・・・・・どうじう訳かこの拉致犯、私がひとり買い物に行つたりすることを許している。つまりどこに行こうが自由なわけだ。しかし実

際、家も分からぬ、小銭程度しか持つていなし　　という現状では、腹立たしくも、この拉致された場所へと戻つてくる他なかつた。一応ウサギは危害を加えては来ないし、彼の纏う奇妙な雰囲気から、これからも大丈夫だろうと変な確信を持つてしまつていた。それに野宿するには心が折れたのだ。

だがやはり、一人で外へ初めて出れたとき、私は直ぐさま交番を探し、駆け込んだ。

警察ならば私が記憶を失くしたことや拉致されたことを話せば保護し、何らかの手立てを取ってくれると思ったのだ。

必死の形相で交番に入つて来た私に、お巡りさんは驚き、どうしたのか聞いてきた。

私は懇願する思いで事情を話そつとした　　が、その時。一組の40代程の男女が交番へ入つて來たのである。私とお巡りさんはふと氣をそちらに配つた。私は一警すると再び事情を告げる行為に戻ろうとしたのだが、あらうことかその男女は私の元へやつてきた。

「ああもう、ダメじゃない！自分勝手なことして！…」

浴びせられたのはそんな言葉。私は、は、と開口した。

私が固まっているのをいいことに、彼女らはお巡りさんへとのれを移した。

「すみません、”うちの娘”が、ちよつと喧嘩したら家を飛び出しちゃつて…」

私は呆然と立ち尽くす。

私がそうして黙つてゐるうちに二人で話はあらぬ方向へとまとめられていつた。

「君、親御さんとは仲良くな。もう交番なんかに逃げ込むんじやないぞ」

お巡りさんは諭すように私にそつ告げた。  
彼ら二人にこにこしている。

私は自分とその場が違う空間にいるような不調和さを覚え、恐ろし

くなり逃げ出したのだった。

「 やつぱりあんたがあの夫婦、手配したんだ」「お皿とフォークを持つてくるよ。サラ、ショートケーキとチョコレート、どちらが好い?」

私は大きくなため息をついた。彼に一警ぐれると、不思議そうな顔を向けて待機している。

私はもう一度小さくなため息をつくと、ショートケーキ、と叫びた。

「 ……やつこえば」

ケーキ。

ふと、あの変な夢を思い出した。

お皿を取りに行こうと部屋から出ようとしていたウサギに向かって呟く。

彼は振り向いた。

「ねえ、あなた前、私の夢に入つて来なかつた?」

ウサギは綺麗なアーモンドの形の目をぱちくりさせた。

「 ……サラは本当、時々奇妙なことを言つね」

思つままに発言し、そしてそう返されて思わず閉口した。

(……確かに。“アリス”に毒されたかも)

私はパソコンをみやる。そこで先刻まで対話をしていた、非現実で空想的な世界を羨望する少女とのやり取りが思い出された。

そんなこんなで被害者という立場の私とウサギという謎の誘拐犯とでお茶をしている。

\*

(……流されている気がする)

悪いことをしているはずのウサギの催す雰囲気と態度はその行為とは掛け離れて奇妙で穏やかなものであるし、この場も小綺麗過ぎる。今に至ってはお茶などしていて優雅なものだ。

ああ、これは困る。“被害者”としての地位が揺るぎかねない。そういえば初日、この誘拐は何が目的なのか問うてみたものの、「僕の目的？・・・よく分からないが、それは君なんじやないか？」と逆に問われた。しかも内容はやはり解答をなしていない。私はどうしてこんな“被害者”になつたのかも解らないのだ。

「どうした？そんな難しい顔をして」

「・・・別に」

私は素っ気なく答えた。

「サラは何でも複雑に考えようとする癖がありそりだから。ダメだよ」

そつなく返された。

……何なのだ。

勝手な私の性格分析にドギマギする。

「それより。それ、制服。あなた学校行つてたんだ？」

私は思わず話題を変えた。

ひと間隔おいてからウサギはああ、これ？？といつ風に受け止めた。

「行つてなかつたよ。でもね、今日、転入してきた」

私は眉をひそめた。・・・つづいてみどりが多すぎるので

今まで学校行つてなかつたのかコイツ。て言つが、何でのタイミングで転入？私を誘拐して、そのタイミングで転入？

私が黙り込んであれこれ心中で呟いていると、ウサギがゆっくりと口を開いた。

「アリスと同じ高校、にね」

私は咄嗟に顔を上げた。ウサギの先程までの涼しい顔と打って変わり、清潔感のある彼の顔に似合わない、いやらしくニヤリとわらう顔があつた。その言葉と彼の様子にこちらも打つて変わって一瞬恐怖感が蘇り、体を硬直させた。

アリス。　まさに彼女が、私が今、パソコンでチシャネコという名を使い、話相手になっている少女である。

こいつは何も考へていらない振りをして、一体何を企んでいるのだろう。

私はウサギとの勝負に勝つために、“アリス”　ヒロインの一人を「救える」、のだろうか。

### (3) 勝負

時間は私がどうやら拉致され、田舎めた初日に遡る。

「そうだね、先ずは君が一番好きだったアリスからいこうか  
君にヒロインたちが救えたなら、すべて元通りにしてあげよう  
と宣った直後、ウサギはそう呟つた。

私は当然ながら困惑した。

(ヒロイン……たち……？救う？　何から)

ヒロイン『たち』ということとは、指している人物は複数人であるの  
だろうということだけは判つた。  
そして。

「アリス？」

私は反芻した。

アリス、ヒロイン。ふと、昔持っていたのだろうか、お伽話の『不思議の国のアリス』の本の表紙が脳裏に浮かんだ。

……家族の顔も思い出せないくせに、どうしてこんな必要無いものは蘇るのだろう。自分の脳に辟易する。しかし、どうやら私は完全に記憶が無い訳でもないらしい。一般常識等は完全なままであると思う。

私が思い出せないのは、自分に関する根本的なものだ。それも細かい所は覚えているのに1番重要な部分が思い出せない。例えば、自分は地元の高校に徒歩で通学していた、という事実は覚えているのだが、高校や通学路の風景、地名等肝心なものが分からないのである。

話を戻して、次に、私はウサギの言ひ意味も解らぬまま、ノー

パソコンを『与えられた。

機械の起動に、よくわからないアイコンの説明。加えてサンインだとか初めて聞く語やら日本語入力方法だとかを機械的かつ端的に告げられた。

彼の意図も判らぬまま、しかし意図が不明なことも脈絡のなさを問い合わせるのももう今更だった（というか、身に起こったことが自分のキヤパシティを越えていたため、そうする気もそがっていた）ので私は黙つて聞いていた。

そしてなんだかんだ解らぬうちに画面に表れたのは、“name;アリス”という文字だった。

「だれ……？」

私が小さく呟くと思いがけず彼は即座に答えた。

「パソコン上では単に“アリス”と名乗っているけどね、彼女の本名は“伏田ありす”。埼玉県に住む女子高生。」

「もしかして彼女が、その、救えつて『ヒロイン』の一人?」

「察しがいいね、サラ」

私は画面上の『アリス』という文字を目を細くして見据えた。

「既に僕が『チシャネコ』という名で彼女とオンライン上で接觸している」

ウサギなのにチシャ“ネコ”なのか。・・・というか、『チシャネコ』に『アリス』。まるで本当に不思議の国のアリスだ。

最早、流れについていけないので、そんなことをつらつらと考えた。

「アリスとのメールのやり取りの履歴は残っているから確認しとくといい

「はあ

他人どうし間の話を覗き見るなんて抵抗あるのだが、何故。

「今日からは君が僕に代わってアリスと話するんだね」

「はあ・・・　は?」

我にかえつた。

何で私がパソコンで、急にウサギに代わってそのアリス、と接触しないやならないのだ。

「その必要性が判らないんだけど」

私は至極真面目に問う。

「少なくとも君にはメリットが有ると思ひナビ?」

・・・考えてみれば、そつか、確かに。

「救え」と言われても何から救うどころかその救うべき人物について何も知らないのではどうしようもない。これは勝負であり、救うというのが私が勝つための条件のようだが、彼女を知るためのハンドをくれたということだろうか。

「判つた、……やってみる」

別人だつてことをバレないよう気をつけたりしないと駄目だらう。

・・・ああ、面倒だ。

私は覚束ない手つきでパソコン上のポインタを動かすと、ウサギもとい『チシャネコ』と『アリス』のこれまでのやり取りをチェックしだす。そうしながら最後に私は問うた。

「ねえ、彼女・・・アリスを何から救えつていうの」

「それは教えない」

きつぱり言われて私は口をどがらし、画面に目を戻した。

ウサギとアリスの対話文を一通り見たが、『アリスが救われたがつていること』や『アリスが困っていること』が分かるどころか、それとは掛け離れて彼等は本當たわいもない話しかしていいようだつた。そしてそれはアリスの空想話や日常への愚痴などがほとんどであり、ウサギは、単に相槌を打つことに専念している。

(謎なことが多いさぎだ)

この対話からみるにアリス自身は楽しく日々を過ごしている、とは感じ取れないものの、それは彼女の空想を好む性分から来ている單なる日常への退屈というものであるようだし、一般的にみて通常な幸せな毎日を送っているのではなかろうか。

『救い』が必要と思えない。

・・・いやしかし、これだけでの判断は良くないだろう。もっと彼女と深く付き合つう必要があるということかもしない。

それよりも　だ。もっと分からないのは『ウサギと勝負』というものだ。ウサギが言つて、私が（何かからは不明だが）アリスらを救えたら私の『勝ち』なのだろう。

では『ウサギの勝ち』はどういった場合なのか。私が救えなかつたら……か？

いや、違う。それは私の『負け』の場合だ。明確に考えて、ウサギの勝ちは“私より先にアリスを救えたら”・・・だ。

考えれば考えるほど頭がショートする氣もする。私は思考を止め、うーと唸り、ベッドに寝転んだ。しかし直ぐに起き上ると、私は自分の頬をパチリと叩き、克をいたた。

記憶は失くなるし、こんな無理難題を押し付けられて、もう何がなんだか判らない。でも、何も出来ないより、何かやることがある方がまだ好いはずだ。

珍しくポジティブ、或いはやけくそに、そう私は考える。

ひとまず私は“アリス”と仲を深めることに奮闘しだしたのだった。

\*

そして今に時間は戻る。

「アリスと同じ高校に転入？何で」  
彼の突飛な発言に私は食つてかかる。

「言つただろ？ 勝負だつて」

私ははつとした。

「・・・するいわ。あんたは同級生で、私は架空に繋がる場での友人。差があります」

文句をいう私を物珍しそうにウサギはまじまじと見る。それにも腹が立つ。

「私、アリスが悩んでいることすら何か分かつて無いのに」  
私はがくりとうなだれてみせた。

「何故、アリスが悩んでることを知る必要が？」

彼は心底不思議そうに聞いてきた。

「だつて。アリスを救うつてのが勝負の条件でしょ？……一悩んでることが分からなければ救いようがないわ！」

「・・・ああ、君はそう捉えたのか」

ウサギは理解したという風に頷いた。

「なに……？」

何、なに。なんか間違つているのか。何か勘違いしてしまつているのだろうか。

「まあ、それなら未だ判らなくて当然。でもきっと必然的に分かるよ

(どつこつといふよ・・・)

そんなどつち着かずで曖昧な発言に、そもそもこんな勝負など成り立つてゐるのかも怪しく思え、私はただ憮然とした。

## (4) アリスの恋

> from : アリス

へきいてチシャネコ！あたし・・・好きな人ができちゃった！

今しがた届いた田の前の画面にある文章に苦笑した。

なにを救えって？

私は独白する。

だって。どうやらアリスは飽き飽きしていたはずの現実も充実したそれに変わったようだ。  
一体何から彼女を救うべきものがあるっていつのか。

「恋愛相談にでものつて、恋愛の成就でも救えっての？」

私はため息をついた。まあ、有り得ないとも言い切れない。・・・  
恋愛経験ゼロの私にそんな自信は全くないが。

とりあえずさりげなく探りをいれた無難な返事を返してみたところ、いつもにも増してハイスピードで彼女から文章が届いた。どうやらアリスは私にこの話を聞いてもらいたくて仕方ないようだ。

> from : アリス

> えへへー。今日ね、転校生がきたの。

「なんかもうビビッときたやつって…これが一旦忘れてやつ? あー恥ずかしい…」

私は「転校生」という単語が出たところで息をのんだ。続けて全て返事を読むと、ガタリと席をたつた。

「どうやら彼女の恋の行方をあたたかく見守ることは出来なくなつたらしい。」

「これって……」

転校生、つて。思い浮かぶのは今日初めて制服を来て帰ってきたウサギの姿。

しかも決定的なことに、彼自身、アリスのいる高校に転入してきたと宣つた。

一日で二人もの転校生が来たという可能性は低いだろう。

「……これってどうするべきなの?」

逆に言えば、どうもしないでいいものであるのか。

ウサギは気付いているのか。いないのか。

普通は知らないものだらうと考えるけど、相手は不可思議極まりないウサギだ。彼のことばかりは普通に考えて太刀打ちできない。むしろ彼は私より優位に立つため惚れさせるため転校したのか? ああダメだ。混乱の余り話が飛躍しすぎてきた。全然、論理的でない。

じゃあ単純な問い合わせ。このことはウサギに話すべきなのだろうか。

否。わざわざ彼が私より優位になつていることなど告げるメリットもないだろう。だつて“人を救う”にはその人と親密にならないといけないはずだ。

実質上ウサギが私より優位に立つたのは違ひないけれど、彼がアリストの好意を知つてそれを利用することになる事態は更に避けるべき事だ。実際ウサギは知つているのかも知れないが、むざむざ人の慕情を知らせる必要も有りはしない。

今すべき事は、アリストと私が親密になるため、彼女の事情を探るため、気の利いた文章を考えることなのだ。

私は再び深くため息をつかざるを得なかつた。

## (5) ハートの「じぶた

「次のターゲットを教えておくよ」

そんな言葉をふっかけられたのは、アリスの恋を知った次の日の夕方だった。アリスとウサギの狭間で動くに動けない私は、その時、現実逃避からスケッチブックに絵を描いていた。このB3の大きさのスケッチブックは、私の唯一の所持品だった鞄に入っていたものだ。絵を描くことが、好きだったのだろうか。

残念ながら、絵を描くことの趣味の有無やこのスケッチブックに関する記憶は存在していなかつた。

「ターゲット、って？」

私は眉根をひそめた。

「サラ・・・絵を描いているのか」

ウサギは自分が一旦発言した内容をそつちのけに、私の手元のスケッチブックに焦点を当てた。

「あんたとの勝負に頭がこんがらがったから、少し違うことをして頭の休憩。……それで、ターゲットって？」

セミロングの栗色の髪を耳にかけ直す。うんざりした声で一度目の同じ質問を投げかけた。

「へたくそだ」

「……は？」

聞かずともその悪口は自分の描いていた絵を指しているとわかつた。しかし、急な言われようど、それがウサギから言われたということに私はぎょっとした。

私が描いていたのは白い猫と薔薇の花。自分で書つのも何だが、客観的につけてもそこそこ上手く描けてる気がする。

「そこまで言われる程、下手かしら　あ、ちよつと…」

スケッチブックが、私の両手から離れた。ウサギが急に取り上げたのである。

「もう、絵は描かなくていいから」「う

困ったような声でいてきっぱりと断言された。そのままスケッチブックをもってウサギは私にあてたこの部屋から出ていこうとする。（描いてるのを見るだけで不快に思うほど私って下手なの？…）ショックだ。

そこまで言われると絵を描く氣も削がれるというものである。しかし、彼らが手にしているスケッチブックは私の数少ない所有品なのだ。私はあわててウサギを呼び止めた。

「ま、待って。返してよ！」

「その棚の、一番上の引き出し」

私の声に振り向いたのかと思うと、突如ウサギは私の背後にある白い飾り棚を指差した。

「そこに、次のターゲットの情報がある。好きにすればいい」

「なに、好きについて」

「そいつはヒロインでもないから、見殺しにしても別に構わない。救うも救わないも君の自由だ」

見殺し　？

物騒な言葉に堂目しつつも、指さされた棚を振り返った。この引き出しほ、前チェックした際、すべて空だったのだが。そもそもターゲット、って意味合いは。

ターゲット　“標的”　？

誰の。

再びウサギの方へと顔をやつた。唯一回答が望める人物は彼しかいない。

しかし振り向いた先には既に閉じられたドアしかなかった。

私はため息をつくと、棚へ向かった。

部屋をでて彼を追いかけることも出来るが、無駄だろう。何となく彼の性格がわかつてきた。ウサギは答えたくないことには、絶対答

えよつとしない。自分が言いたいことだけしか言わないのだ。

指示通りの一一番上の引き出しを開けると、大きい茶封筒が入っていた。  
厚さは薄い。

それを取り出したと同時に、私は封筒のすみに何かが小さく書かれて  
いるのに気付いた。目を見張る。

私は無意識に声を出してその文字を呟つた。

「三回のじぶた、哀れな三男」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5931m/>

---

童話少女

2011年1月8日22時52分発行